

不一致ラベルづけ課題を用いた発話タイミングの検討

安田哲也^{1,2}・小林春美²

(¹ 埼玉県立大学・² 東京電機大学理工学部)

子どもが語意を推測する際、さまざまな手がかりを用いて他者の指示意図を読み取り、環境の中の指示された対象と意味を適切にマッピングしなくてはならない。Kobayashi and Yasuda(2007)は、不一致ラベルづけ状況(DLS)を用いて子どもの視線を分析した。DLSとは、子どもが注意していない他の事物を注視しながら、事物の名前を発する状況である。結果、子どもが事物を選択した10秒後に声がけした際に、2歳児の約4割、4歳児の約6割が実験者の視線を確認することなく、実験者が意図した事物を見る場合があることを報告した。Yasuda and Kobayashi(2008)では、DLS時の声がけタイミングをDLS成立直後に変更し実験を行った。その結果、DLS成立直後に声がけした場合、2歳児の約6割、4歳児の約7割が、いずれも実験者の視線を確認した。事物を手にとってから10秒後に、自分の手に持っている事物に対して、今発見したような口調で名称を提示することは不自然であるという、語用論的解釈を用いた可能性が考えられる。本研究は、DLS時に幼児は実験者の5秒後声がけに対し、語用論的解釈を用いるかについて調べた。比較するために10秒後声がけのデータを用いた。

方法 参加児は東京都内の保育園に通う2歳児12人と4歳児11人を対象とした。手順はYasuda & Kobayashi (2008)が行った手順を用い、実験を行った。参加児を実験者と対面に座らせ、テーブルの上に1セットの新奇な事物を並べた。実験者は参加児に好きな方を選ぶように指示した。実験者は参加児の選んだ事物に集中した5秒後に、参加児の手に持っていない事物(OA)を注視しながら、無意味シラブルを用いて「○○ちゃん、ムタだ!」と声がけを行った。その後、どちらの事物を無意味シラブルに結び付けて解釈したかを尋ねた。試行は4回行われ、正しく推測できた場合に1得点とした(Max=4)。条件は被験者間要因として、年齢群(2 vs. 4)と発話タイミング群(5sec vs. 10sec)であった。なお、発話タイミング10秒条件は、Yasuda & Kobayashi (2008)のデータを用いた。

結果・考察 幼児が語意を正しく推測できたかについて、チャンスレベルとの比較を行った。4歳児において10秒後に声がけした場合にチャンスレベルとの差に有意な傾向があった($t(9)=2.101$, $p=.0501$)。他の条件に有意な差は見当たらなかった。

図1に2歳児の語意推測得点、図2に4歳児の語意推測得点を示す。得られた得点は、低得点群(Score 0-1)、中得点群(Score 2-3)、高得点群(Score 4)の3カテゴリーに分類した。このカテゴリーの頻度について χ^2 検定により調べた結果、カテゴリーの分布に有意差は見られなかった($p>.10$)。

5秒では比較的得点の低い参加者が集まり、2歳児においては約6割の参加者がDLS状況時に正しく語意推測しなかった。一方、10秒後声がけの分布を見ると2歳児では約4割、4歳児では約7割の参加者が高得点群を占めていた。声がけのタイミングが遅れると語用論的解釈が起こる可能性があることを示唆した。Yasuda & Kobayashi (2010)では、共同注意状況と発話タイミング10秒後を用いて実験を行っており、4歳児において10秒後声がけを行うと誤った語意推測を行ってしまうという報告がある。今後、様々な発話タイミングを検討することにより、語用論的解釈がどのように起こるのかを調べる必要がある。なお、この研究は基盤研究(C)(Kaken 24530793)の補助を得て行われた研究である。

参考文献

Yasuda T, & Kobayashi H. (September 2010). Influence of 10 Seconds Interval in Pragmatic Interpretation. the 19th IEEE International Symposium on Robot and Human Interactive Communication, 204-209, Viareggio Italy.

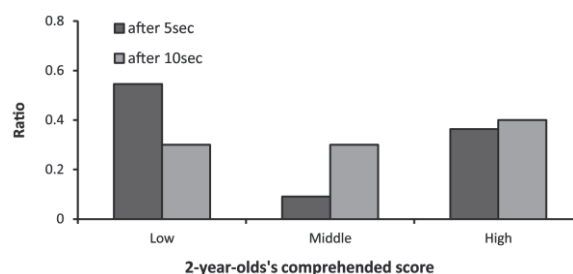


図1. 2歳児における語意推測得点

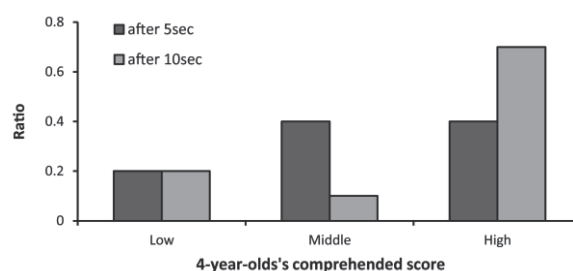


図2. 4歳児における語意推測得点